

☆ 特 報 !

下村勝彦

今年は【静商相撲部創設99年・屋内土俵創設40年】

静商の歴史の中に初めて「相撲」が取り入れられたのは大正5年（1916年）である。9月29日発行「會詩」一頁の山崎弥久太郎校長先生、講話「訓言一束」の中に、「負けず魂があつて、初めて志業は成就する。本学年から実施した（相撲）・撃剣）何れもこの気魂を練るの主旨に外ならぬ。特に相撲なり・突っ張る打ち込む・攻撃精神の鍛錬が眼目であることを忘れてはならぬ」とある。先生は、本校就任の辞に「質実剛健」の気風を望み（まじめなれ）・（地味なれ）・（強くなれ）の3カ条を力説された。

2年生、前島重吉の「角力」記の中には、浅間神社の角力大会が前年頃より始まった事や、当時の青年相撲の大関「小桜」や「日本刀」の名前もあり、相撲大会の様子も書かれている。又、静岡民友新聞には、相撲が盛んとなり、市内にも十数ヶ所に土俵が造られたという記事も見られる。

大正5年10月17日1時より、静商土俵開きを兼ねて「第一回相撲部大会」が開催された。

大正6年5月26日「第二回相撲部大会」が開催され「学友會詩」には、「本部は大正3年、4年戦役に参加せる卒業生20余名の寄附により創立したるものなり」と記されている。又、相撲部幹事、中山秀松の記に「相撲部員へ」との題で「創部1年目を迎え、力・技共に進歩したが、発足した徒歩部には負けないう頑張ろうや」という檄文が書いてある。

こうして、静商の相撲部がスタートした。多くの先輩部員により、輝かしい成績を残した年、又休部となり、復活に力を合わせた年など、栄枯盛衰を繰り返しながら、99年、来年100年という大きな節目を迎える事になった。しかし現在の部員は小林龍弥（2年）一人であり、来年は部員を一人でも多く確保し100年という記念の年に、静商相撲部の新しいスタートの年としたいものである。

屋内土俵は、昭和50年（1975）6月28日に、今は亡き大関魁傑を招き、焼津水産相撲部他多くの関係者が参加して、土俵開きが行われた。部員は2年の斎藤慎次郎、1年が羽山雄人、富安晴彦、柘植雅彦、森の4名であった。ただ一人の2年生で、部員をまとめた斎藤は白龍20号の中で、「私は、これほど男を感じたスポーツは、17年間出会ったことがない、あの揮姿、私は揮をした事のない男なんて、男と認めない。一生に一度はしめるべきである。」と記している。

静商の野崎校長先生から、「ぜひ相撲部を復活して欲しい、学校も協力します。」という有難い言葉をいただいています。

この屋内土俵に、再び活気が甦るよう今こそOBの結束が大事な時である。底辺拡大、情報収集など幅広く展開し、創部100年、道場創設41年にふさわしい28年のスタートができるよう、先ず、自分の身のまわりから耳と、目をくばって下さい。

完。